発行　全国商工会議所青年部連合会
東京都千代田区丸の内3－2－2
日本商工会議所中小企業振興部内
☎03－283－7847
編集　広報委員会

翔生（しょうせい）

昭和63年（1988年）
3月1日号
通巻　第4号
（年2回　3月・10月発行）

63年度商青連年間スケジュール

63.	4／12	第27回商青連役員会
	5　月	商工会議所青年部運営活動状況調査
	6／3	第28回商青連役員会
	6／4	四国ブロック大会（坂出商青主管）
	7／28	第29回商青連役員会
	8／26	九州ブロック大会（平戸商青主管）
	9／2	近畿ブロック大会（奈良商青主管）
	9／4	中国ブロック大会（鳥取商青主管）
	9／10	東北ブロック大会（長井商青主管）
	9／13	東海ブロック大会（津商青主管）
	9／16	関東ブロック大会（浜松商青主管）
	9／17	北陸信越ブロック大会（中野商青主管）
	9／24	北海道ブロック大会（浦河商青主管）
	10／1	商青連『翔生』第5号発行
	10／5	第30回商青連役員会
	11／17	第31回商青連役員会
		第9回会員総会（山口市にて）
	11／18	全国大会（山口県連主管・山口市）
	12／6	第32回商青連役員会
		64年度役員との懇談会
	12／7	64年度役員第1回打ち合わせ会
		及び64年度正副会長第1回会議
64.	1／20	第33回商青連役員会・64年度
		役員会第2回打ち合わせ会
	1／21	64年度正副会長第2回会議
	2／9	第34回商青連役員会
		第6回中央研修会
	2／10	第10回商青連会員総会
		64年度役員第3回打ち合わせ会
	3／1	商青連『翔生』第6号発行

盛大に第8回会員総会

商青連創立五周年を機に飛躍期す

商青連の第八回会員総会は、二月九日午前九時から東京商工会議所ビル国際会議場で全国から会員一五〇人が参加して開催された。開会宣言を行い、「商工会議所青年部の歌」を斉唱、古川伸二会長のあいさつのあと、議題に移った。

議題の協議事項は、六十三年度事業計画（案）と同収支予算（案）など。協議の結果、原案とおり採択された。総会最後に六十三年度商青連会長の萩原幸昭氏が力強く新年度に向けての抱負と決意を語った。

特別委員会設置など記念事業

六十三年度予算額は一、三九七万円。前年度より二二二万円増。これは、過去の商青連加入実績で年間約二〇〇青年部が加入していることから、前年度対比で一二二万円増となり、残り一〇〇万円は「創立五周年記念事業積立金」を取り崩し、収入計上した。

これに対応する記念事業として、支出に一五〇万円を計上した。

六十三年度の特色としては、商青連が発足から満五周年を迎えることから、これを機に「特別委員会」を設置、「青年部の今後のあり方」の取りまとめを行う。

〔バトンタッチ〕
商青連旗を前に握手する古川会長（右）と萩原新年度会長

63年度商青連事業計画

若い感覚と英知を結集して地域社会の発展に貢献しよう

貿易摩擦、円高基調などの課題が山積するわが国経済環境下にあって、商工会議所青年部が自らの若い感覚と英知をもって、豊かな地域社会の発展に貢献することが、より要求されているところである。

このような観点から、全国商工会議所青年部連合会は、創立五周年を機に、さらに組織の強化を図りつつ、六十三年度の事業活動を左記の通り展開する。

一、組織の拡充・強化

組織の拡充・強化を図るための事業を行う。

①単位会議所青年部の結成促進と商青連への加入促進
②ブロック別運営研究会及び部会長会議の開催
③県別の青年部連絡会の開催と県連結成の推進

二、研修・研究活動

企業経営と、それを取り巻く環境を勉強することによって、青年部指導者並びに青年経営者の資質の向上を図り、併せて会員相互の親睦と連携を図るため、中央研修会を開催するとともに、異業種及び地域間交流の促進を図る。

三、広報活動の推進

各青年部間の情報交換を促し、青年部活動の活発化を図るため、また、広く社会一般に対し、青年部活動を積極的にPRするために必要な事業を行う。

①機関紙『翔生』の発行
②「会議所ニュース」及び「石垣」の活用――青年部活動の情報を両紙誌を媒体として提供する。
③青年部運営活動状況調査
④商工会議所並びに日本商工会議所の広報活動に対する協力

四、主要会議の開催

①会員総会②役員会③全国大会

五、政策提言活動

目まぐるしい社会経済環境の変化に対応した商青連としてのポリシーを確立し、心要に応じて関係方面への意見具申、建議要望を行う。

六、創立五周年記念事業

①「青年部の今後のあり方」の作成
②商青連未加入青年部との懇談会の開催、アンケート調査の実施
③青年部会報コンクールの開催
④会員への懸賞論文の募集

21世紀への長期ビジョンを策定

～商青連ポリシーの確立を～

六十三年度商青連会長　萩原　幸昭

昨今の経済社会は、技術革新や高度情報化の進展、急激な円高の進行、国際化の進展に加えて、人口の高齢化等様々な変化からくる産業構造の変動が進み、企業をとり巻く経営環境は誠に厳しいものがあります。

このような中で、地域の総合経済団体である商工会議所の使命は、益々重要となってきております。

商工会議所のすぐれた特性の中に公共性、地域性、総合性、国際性があります。これはただの文字でなく変革の時代の今こそこの特性を発揮することが何よりも必要であると思います。とりわけ若い感覚と行動力を持つ青年部が、行動する商工会議所の中に不可決であると思います。

そのような観点から、我々は新たな課題に柔軟な思考と勇気を持って積極的に当ることが何よりも緊要かと思います。特に今年度は商青連創立五周年にあたり、ひとつの活動のステップとして新たなる出発をしていかなければなりません。

協調と飛躍をテーマに

今年度の事業については、基本的には前年度の事業を引継いで行くことになるかと思います。こうした中で『協調と飛躍』を基本テーマとし、組織の強化と財政の確立・効率的運用を図りながら商青連会員本位の事業を推進致します。

①組織については、組織強化拡充を図る。一月三十日現在、四八八商工会議所に二九五ヶ所の青年部が設置された。全体の六〇・五％である。今年度は一〇％増の三二五ヶ所の設置を目標とし、合わせて商青連未加入青年部を対象にした懇談会を開催する。

②研修については、青年部あるいは企業の経営者及び後継者の資質の向上をねらいとし、併せて会員相互の交流を図る為の中央研修会及び異業種・同業種の交流の開催を実施する。

③広報については、会員に親しまれる紙面づくりをモットーとし、特に会員の活動のよりどころとなる各地商工会議所青年部の会報のコンクールの実施等を図る。

④総務では、論文懸賞募集及び他団体との交流会を進める。

⑤主要会議、移動役員会及び九ブロックの運営研究会、全国大会の開催を積極的に推進する。今年度は山口県連主管で山口県で開催する。

⑥政策提言活動については、予測出来ない目まぐるしい社会経済環境の変化に対応した、商青連のポリシーの確立、さらには関係方面への建議陳情を行う。

⑦今年度創立五周年に当り、特別委員会を設置し、記念事業を展開する。内容として、青年部の今後のあり方「二十一世紀のビジョン」の策定と配布等である。

以上今年度事業を述べましたが、是非皆さんの参加意識の高揚をお願いしながら、これらの事業を進めてまいりたいと思います。

先輩が築いてこられた商青連も、歩みつづけて早や六年目に入りました。商青連は各地商工会議所青年部の連合会の組織であるという認識のもと、内部充実を図りながらさらに一歩外へ踏み出した活動にも目を向けてゆかなければなりません。今、時代に欠け、時代が要求しているのは、柔軟発想と熱意と勇気を兼備した若者の現出であると思います。商工会議所青年部活動を通して自らの企業経営基盤の確立と、豊かな地域社会の構築の一助になれば幸いです。どうかこの一年、関係各位の御指導、御鞭撻の程お願い申し上げ、私の抱負と致します。

躍動する日本列島青年部

職場対抗ボウリング大会を主催
北海道美幌青年部

青年部主催で開かれた職場対抗ボウリング大会（美幌町）

美幌町は北海道の北東部に位置し、人口約二万七千人、農業と商業の緑豊かな田園都市です。又、観光としては阿寒国立公園の表玄関で、NHKラジオと松竹映画「君の名は」で一躍脚光を浴びた天下の絶景「美幌峠」があり年間百万人あまりの観光客が訪れています。

当部の発の足は昭和五十五年で、「経済人としての自己研鑽、自己啓発に励むこと」を目的に設立されました。設立当初は勉強会に終始したためか定例会の出席が悪く、出席率を高めるための手段として、花見、ボウリングなどをはさみ、会員相互の親睦を図り出席率上をはかりました。おかげで出席率も極めて良くなりました。

現在、当部の活動は、親会議所事業の協力、各種講演会、研修会、他青年部との交流会を行なっております。加えて六十一年度には初めて商工会議所会員事業所の福利厚生事業として、青年部が主催になり第一回職場対抗ボウリング大会を開催しました。当日は三十六事業所、応援も含めて約百五十人が集まり、気持ち良い汗を流し和気あいあいのうちに終了しました。特に商工会議所会員事業所からは強い継続要望もありましたので、当部の継続事業として開催することにし、六十二年度は二月に第二回目を開催し、大変好評を得ました。部員のみんなは第三回目をどの様な内容にしようかと今から考えこんでいるところであります。

（美幌商工会議所青年部部長　前田豊太郎）

『城下町白河』を活かす
福島県白河青年部

五十八年に設立して以来、三代の会長が青年部発展のために尽力し、現在四代目兼子会長のもと、七十名の会員が自己研鑽に努めています。

我々青年部は、総務・研修・親睦・広報・小峰城・自己啓発と六委員会で構成され、各々の年間計画にしたがって活動しています。

そのなかで、特色ある委員会としては小峰城及び自己啓発委員会が挙げられます。小峰城委員会は、白河という街のシンボルともなりうる小峰城を、他の城下町の「城」のとらえ方などとも合わせて研究し、白河の発展にいかに活用できるかを考察することを目的とした委員会です。

また、自己啓発委員会は、今年度の我が青年部の目玉として設置したもので、これは東北人気質ともいうのでしょうか、人前に立って自分の意見を述べ、理解してもらうが不得手な我々（反面引込み思案なのであろうが）が、意見をかわすことによって相手の意志を確認しあえるように訓練していこうという委員会です。

「城下町白河」が青年部に与える影響には、かなりのものがあるように思われます。実際、アンケート調査等による小峰城復元へのアピールを実施しようという意見も挙がっています。また、城下町ながらの封建的前世代と考察の相違も出てきています。

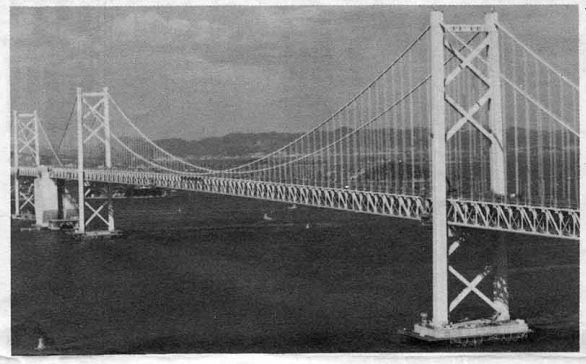
昔から続いている商店街が本業以外においてリッチになって「リッチになった商店街」「エイズより怖い小金持病」（あすの白河を考えるシンポジウム講演より引用）というような問題も抱えています。

こうした中で我々青年に必要なことが、異業種間の交流です。青年部は発足することに意義があるのではなく、成長しながら継続されていくことが重要です。参画している会員相互の親睦のみならず、互いに影響しあうことの大切さを忘れずに行動していくことが、青年部活動の根底にあるべきでしょう。

城下町白河に活力ある青年部あり、といわれるためにも一層の会員の協力と努力が必要です。

（白河商工会議所青年部　副会長　杉山　博之）

瀬戸大橋の街・坂出
香川県坂出青年部


坂出青年部では、瀬戸大橋の完成を機に様々な事業に取り組む

昭和六十三年四月、瀬戸大橋こと本州四国連絡橋児島・坂出ルートが開通します。これによってはじめて本州と四国が道路で結ばれることになります。この瀬戸大橋の四国側の架橋地が坂出市です。

いま、瀬戸大橋の開通を控え私達の街坂出は、期待と不安で揺れ動いています。私達青年部は、この転換期を千載一遇のチャンスとするよう様々な事業に取組んでいます。以下最近の主な事業を紹介いたします。

◎納涼船

坂出まつりの協賛事業として、海上花火大会を船の上から見学するというものです。

◎ミス坂出コンテスト

青年部が『ミス坂出コンテスト』をはじめて三回を数えました。またその発表会においては、横浜大洋ホエールズの古葉竹識氏の経営講演会を開催いたしました。

◎瀬戸大橋物産バザール

市民にふるさとの物産を再認識してもらい、みやげ物等のPRならびに新しい品物を生み出そうというものです。

◎中学校野球大会

坂出市を少しでも活性化させようと中学校の野球大会を開催しました。これは、坂出市内または隣接する町の中学校の野球部を集めて行いました。（坂出青年部部長　水尾　一二）

関東B研究会開催に燃える
静岡県浜松青年部

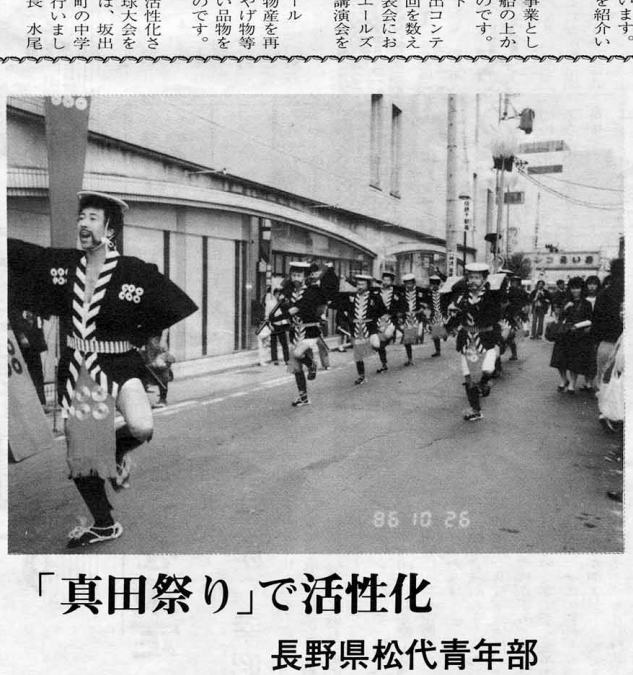
浜松市は、静岡県西部に位置する中核都市として、人口五十二万人。世界的に有名な楽器、オートバイの産業が市の産業を力強くさせています。また、豊かな自然と温暖な気候にめぐまれて、浜名湖のうなぎ、三ヶ日のみかん等、全国的に有名な一次産業を控えております。

私達の青年部は六十年十二月の設立からちょうど二年たちました。設立当初から、浜松商工会議所の内部組織として、定款に明確に位置づけされるほど、正副会頭を始めとする会議所の絶大な理解を支援のもとに発足するという最大の幸運に恵まれました。

その理解と支援の基に、百八十五名の会員が政策研究、研修事業、会員交流、総務の五委員会にわかれ、ビアパーティやゴルフ大会等によって培った会員相互の親睦をもとに、地域経済の活性化の研究を基盤とした意見、要望、提言、あるいは自己研鑽の為の勉強会などに幅広い事業活動を活発に展開しております。

ここに今年度は浜松商工会議所の重点事業のひとつでもある〝コンベンション都市づくり〟に関して、その調査、研究を委託されるなど青年部活動に対する理解ばかりでなく若者らしい発想や行動力に大きな期待をよせられています。

こうしたエネルギーの源は、当市においては、浜松経済クラブ、浜松青年会議所などで若手経営者の団体が数多くあり、それぞれに活発な事業活動を展開してきた歴史の中にみることができます。その永年培われたエネルギーを基に、六十三年度開催させていただくことになった関東ブロック運営研究会を成功させるべく、その準備委員会を設立し開催に向けて一丸となって取り組んでおります。（浜松商工会議所青年部部長　沼田　佳之）



真田祭りで奴姿に扮した松代青年部会員

「真田祭り」で活性化
長野県松代青年部

長野県、とりわけ長野市周辺は、全国的な高速交通網の整備から取り残され、観光・商業・工業と全てにおいて立ち遅れている。

しかし近年、高速自動車道の建設が具体化し、青写真が出来、松代町に長野インターチェンジが設けられる事となった。

現在の松代は、特筆すべき産業が無く、地盤沈下が著しい。しかし真田十万石として栄えた城下町の松代には、史跡文化財がいたる所にある。これを生かした町造りがこれからの松代の発展につながると、町民全員が少なからず考えている様である。特に若手後継者である我々は一層強く感じているのはあたりまえである。

この歴史的資源に恵まれた松代をどう対外的にアピールし、広く知ってもらえるのか、行動を起した。三年前より製作に入ったPRビデオ「松代探訪」を昨年販売し、また真田邸を図案化したテレカの販売、青年部のイメージ図案をプリントしたTシャツの販売等である。

これと並行し、毎年文化の日に行なわれる松代最大の祭り「真田祭り」にも積極的に参加し、町民文化祭としてなく、メジャーな祭りへ脱皮するために、広報活動を受け持ち、イメージアップを図っている。当日は、十七名が奴姿に扮し「槍り振り」を行ない大名行列に華を添えている。

また「真田祭り」の一環として、十月一日に信濃毎日新聞主催の「史跡めぐり健康ウォーク」が三年連続で行なわれ、我々が主管をし、ガイド役となり参加者を町内の史跡へ案内をし、PRを行なっている。

これからは、商工業にこだわらず、他の団体の青年団、青年部とのつながりを持ち、皆で共に地域を見つめ二十一世紀の町造りをしていきたい。

（長野県松代商工会議所青年部副会長　青木　丈洋）

加入率の促進を

私達北海道ブロックは、昨年東北・北海道ブロックから北海道ブロックとして分離・独立致しましたが、現在全道四十会議所の内、青年部設置数が十一しかなく、しかも、商青連加入数が三と全国最低の加入率であり、商青連の目的であるブロック内での相互交流等の活動が、まならない現状で、私も全国連副会長として、残念でなりません。

六十三年度に、第一回の北海道ブロック運営研究会を我が浦河で開催し、これを機会に、道商連のご協力を仰ぎながら加入率の向上を積極的に図っていきたいと考えております。

北海道ブロックにとりましても、又我が青年部にとりましても、六十三年度を有意義な年にすべく全力を傾注してまいりたいと思います。

（浦河商工会議所青年部会長　奥田　利明）

躍進の土台「市民の広場」

福井県福井青年部

地域社会振興への貢献という命題は、商工会議所青年部の目的の重要な命題の一つであります。私達はこの命題に答えるべく、十一回連続の継続事業として、「市民の広場」を開催して参りました。福井の街づくりを基本テーマに、市民の皆様と共に考える公開討論会として種々の実績をあげてきました。昨今では、福井青年会議所、松下政経塾など他の若手団体も、"フォーラム"、"フォーラム"と盛んに公開討論会を開催するようになりましたが、正に先駆的役割をになってきたわけであります。

第八回までの事例については五十九年度活動事例集でご紹介をさせていただきましたので第九回より市民の広場についてご報告を申し上げます。

第九回市民の広場では、――新たな出会いのある街へ――足羽三山を活かす私達の提案と題して、折からのコンベンション都市構想への青年部としての提案を積極的に展開し、コンベンション推進機関設立への気運づくりと都市開発の新しい視点の提起をしました。

第十回では、街づくりを進めるうえでのネットワークづくりの重要性を提唱し特徴ある街づくりへ『アートシティー構想』を提案し、公共建築物のアート化、芸術性のある民間建築物への賞の授与、再開発計画に芸術性をもたせなどの提案をし、本年、県文化振興事業団主催の、まちなみ景観賞常設の動機をつくりました。

第十一回本年度は、新たな出会いのある街へ―福井のシンボル足羽三山を考える―と題し、第九回と第十回を受けて、成熟したコンベンション構想と、第三ゾーンの開発構想とが連動し、県、市、教育委員会などの後援を受けて、六十三年二月二十七日に、市長をおまねきして公開討論会を開催致しました。

青年部の三年間の主張が実り、市と市民による六十四年度に迎える市制一〇〇周年事業計画の中にもこの開発計画は盛り込まれて、今、市全体の大きなコンセプトになろうとしております。

福井県の県都に、商工会議所の青年部会員の県都に対する熱い情熱が今、市や県、商工会議所を大きく揺り動かし、活動ある県都創造への礎をつくろうとしています。

福井青年部会主催による「市民の広場・街づくりシリーズ」の公開討論会

沖縄での全国大会は、高岡から参加した23名に大きな感銘を与えた

沖縄の全国大会は、日本の広さを痛感させてくれました。高岡から参加した二十三名の仲間は、みんな元気に沢山の思い出をつくり帰ってきました。新入会員で四名参加しましたが、平、素出張がない仕事なので、青年部会に入り良い出張が出来たと喜んでいます。

先輩達が全国組織をつくるために力を合せて頑張ってきた成果が、ここにあると感じました。高岡部会も

青年部活動に思う

自分自身を磨き上げる場

富山県高岡青年部会長

小竹茂樹

その重要な役割をはたしてきましたが、青年部の基本方向を確認し、原点にたちかえって頑張りたいと思っています。

高岡部会は定款第3条に次のように明記しております。

「本会は経営者としての人格、教養及経営能力を高め、企業の近代化を図るとともに会員相互の啓発親睦を図り、あわせて高岡商工会議所の事業活動に寄与することを目的とする」。

二十一年に及ぶ高岡青年部会の活動の歴史の中で、この第3条は一貫した流れとなっており、百二十名を超えるOB会員と二百名を超える現会員の存在は、高岡の経済活動に少なからず影響をあたえています。

私は現在、一人ひとりの会員が自分の事業を足場にして、努力を積み上げ異業種交流組織である青年部会に参加をして、自分自身を磨き上げていくことが重要であると思います。

青年部会の原点を見直すという課題は、会員一人ひとりが自分の経営、事業の目標をはっきりと持ち、その達成の気概をもって集うことであると思います。

時代は今、全ての業種が第三次産業化、サービス業化へ流れ、お客様にいかに満足を提供できるかが決め手となるように変化してきています。過去の経験や実績だけをふり回す時代は終りをつげ、新しい感覚で経営、事業にアプローチする際には同業者の集まりだけでは絶対に道はひらけません。

今こそ、人材育成組織としての青年部の存在意義が鮮明になってきていると思います。

総合開発計画を提言・推進

島根県平田青年部

我が市は人口三万人余の農村都市で、県都松江市と出雲市に挟まれた経済環境にあり、商業流失がだんだん大きくなり、若手経営者の間で、危機感が高まってまいりました。

こうした中にあって、地域の活性化を図るためには、地域開発の短期・長期的なビジョンづくりの必要性を親会に提言し、商工業のみならず全産業を含め、文化・教育までを模索する、平田市総合開発協議会の設立をみました。これの組織・運営にも青年部メンバーが中心となり、積極的な推進をはかり、民間団体としては県下でも特筆される、市の総合開発計画を市民のアンケート調査等をもとに、B四判で百七十頁にもわたる、提言をとりまとめ、市長・市議会・県等に担言いたしました。

本年は、この提言が一つ一つ事業実施に結ぶよう積極的な推進運動を展開していきたいと考えています。

又、昨年五月の市長選挙において、五期二十年の現職市長に対し、我が青年部のメンバーが、一騎打ちをいどみ、みごとに当選を果しました。この結果、従来より、より以上の行政との連携が出来つつあり、「平田のまちづくり」については、必らず行政より親会及び当青年部へ諮問があるようになりました。現在も、宍道湖公園構想・ユニチカサンシ跡地利用について諮問を受けております。

宍道湖公園構想というのは、宍道湖西岸に面する約四haの土地の利用構想をいいます。この近くには、県立青少年の家の建設予定があります、サイクリング道や全国的な鳥の観察の最適地でもあり、この恵まれた自然とマッチした施設づくりが検討されつつあります。また、ユニチカサンシ跡地というのは、駅の西五百㍍のところに、約一haの土地があり、場所もいいことで商業集積地としての利用が、熱望されているところです。

行政と民間が一体となった市政が展開されつつあることは地域の活性化にむかって、たのもしい限りです。（島根県平田商工会議所青年部　会長　大島　治）

宍道湖公園予定地を視察する青年部。市の担当者から説明を受ける（平田）

伝統文化でまちづくり

三重県伊勢青年部

「青年部をうまく運営しよう、なんてさらさら考えない。少々のアツレキはあっても、ひとりひとりの会員がその個性を発揮し、存在感を感じてくれる集団であれば……。形骸化された組織にだけはしたくない。」

そんな気概をもってスタートしたのが一昨年（一九八六年）の十一月。約一年余り経ったいま、伊勢の若き個性派集団は、商工会議所関係はもとより、一躍、地元各界から注目を浴びる存在となってしまいました。

その口火を切ったのが〈伊勢薪能〉。私共は能そのものに格別の興味を抱いたわけではありません。ただ、わがふるさとで埋れた多くの伝統文化の中から、明日の伊勢の「まちづくり」の突破口として、六五〇年の歴史をもつ「伊勢の能楽」を選んだにすぎないのです。

準備から実施までがわずか二ヶ月足らず。燃える軍団の不眠不休の努力が結実しました。神宮境内の緑をバックに演じられた、幽玄の世界は、三千人を超える観衆を魅了し、TV、ラジオのトピックスとして、また新聞各紙でも報じられ、「伊勢商工会議所青年部」が大きくクローズ・アップされたのです。

注目浴びた「伊勢薪能」

その後、実施された研修旅行では、かねてからの構想である「集会都市」に焦点をしぼり、その道の先進地、金沢を訪問。官民一体のコンベンション・ビューローの現状をつぶさに視察しました。我が青年部の今後の運動のメイン・テーマとして、現在、議論百出の状態です。

わけても、金沢で開催された「フード・ピア」には、若手会員が感銘を受け、さっそく調査活動に入るなど、積極性とスピーディな対応が当青年部のきわだった特徴となりつつあります。

逆にこうした会員個々の意欲を、組織がどう吸収し、運動体として、伊勢商工会議所の中で位置づけるのか、今後に課せられた命題といえるのではないでしょうか。（伊勢商工会議所青年部会長　若松徳生）

部設立20年「地域の主役」

大分県竹田青年部

竹田商工会議所青年部は、昨年で設立二十周年を迎え、十一月二十三日、竹田商工会館で設立二十周年記念式典ならびに記念講演を挙行、又ホテル岩城屋で懇親会を開催しました。

記念講演には郷土の先輩朝日洋行代表取締役専務西川渉氏をお招きし、「コミュニター航空と地域経済」と題した講演で、先進地米国の歴史と実例やビデオ上映を通じて、二十一世紀の高速交通体系の主役であるコミューター航空が、地域経済に与えるメリットは、フライト・野菜等による農家の高収入化、観光の国際化、商工業の市場拡大等、数えたら切りがありません。

竹田商工会議所青年部会は、この二十年間「親睦と研修、創意と工夫」というスローガンのもとに、大名行列（青年部会主催、六十三年四月で十五回）、文化書画展（豊後南画を中心とした書画展、六十二年十一月で十三回）という二大事業のほか、姫だるま投げ込み、岡城跡の桜の植樹等諸々の地域開発事業を行ってきました。

我々は、二十周年を契機として、これらの恒例の事業を継承しながらも、二十一世紀に向って、経済社会構造の変化に対応できるよう、地域経済を支える若手経済人として、新しい竹田市の創造に、一致団結努力することを誓いました。

記念式典には、池増・萩原両副会長、首藤県連会長をはじめ多くの皆様の御出席をいただき、盛大に挙行することができました事を、部会員一同心よりお礼申しあげ、竹田よりの報告を終ります。（竹田商工会議所青年部会長　西健）

竹田青年部会設立20周年記念式典

燃える青年部、沖縄に集う

11・7 第七回全国大会に千六百人参加

「翔こう商青連、創ろう日本の未来」を大会スローガンに、第七回商工会議所青年部全国大会が盛大に挙行された。主会場の沖縄市民会館には、全国各地から、千六百人の若き経済人が集い、式典からパネルディスカッション、講演会と大会プログラムを進行した。

式典は、西銘沖縄県知事、国場沖縄県商工会議所連合会長、桑江沖縄市長、守屋日本商工会議所常務理事、県選出の国会議員等多数の来賓の出席のもとに、午前十時半から始まった。まず、全国商工会議所青年部連合会会旗が入場し、商工会議所青年部の歌「伸びゆく大地」を斉唱の後、古川伸二会長が「この大会を青年経済人の相互交流と自己研鑽の場として実り多い大会にしたい」と決意を述べた。

続いて、主催地を代表して、石川正一氏（沖縄県商工会議所青年部連合会長）が「祖国復帰十五周年の節目に、沖縄で全国大会を開くことができて、この上ない喜びである。本県の青年部にとっても意義深い。この大会がそれぞれの地域の活性化を促進するために、大きな成果を上げるよう期待している。又、会員の皆様が、沖縄の大自然と社会情勢を肌で触れられることを希望する」と力強くあいさつした。そのあと西銘沖縄県知事を始めとする、多くの来賓祝辞と続き、式典は午前中に終了した。

午後からは第二部の、パネルディスカッションに入り仲井真弘多氏（前通産省工業技術院審議官）が「世界経済の中で日本の果せる役割」と題して、〝日本は技術移転で世界へ貢献すべきだ〟と基調講演を行なった。パネラーとして、橋本晃和氏（帝京大学助教授）、ブルース・E・カーター氏（在日米国大使館運輸東西貿易課長）、アンソニー・ミリトン氏（在日英国大使館政治参事官）、嘉数啓氏（琉球大学助教授）、西田宗旦氏（日本貿易振興会計画課長）らが参加し、活発な論議が行なわれた。第三部の記念講演は、午後四時から行われ、中央経営研究所代表の氏家康二氏が「いま次代青年経営人に求められるビジョン」をテーマに講演し、「産業人は何事もやればできるという可能思考で未来を切り開き、合理性を身につけ、開拓精神を発揮すべきである」と強調した。六時半からの懇親会は会場の市民体育館に移り、大城真順氏（衆議院議員）の乾杯の後、祝宴が開始された。会場は和気あいあいのうちに会員の親睦を深め、今後一層の相互の連帯と交流を約束し、本大会を成功裡に終了した。

盛大に催された沖縄での第７回全国大会

ニュース商青連ファイル

大きな成果を得て!!
―第５回中央研修会―

商工会議所青年部連合会の第五回中央研修会が、去る二月八日～九日にかけて、東商ビル国際会議場をメインに、全国から百八十名余の若さ溢れる青年部の代表が集まり研鑽に努めました。

一日目は、日本商工会議所特別顧問・日本電信電話㈱社長であられる真藤恒氏による、「私の経営体験から」をテーマとした講演をお聞きしました。そして、氏の経営理念は、正に日本の経済成長を物語るものであり、絶えず変化する諸情勢の中で、先んじた方法を考え実行することを強調され、体験を通じてのお話に、参加者一同強い感銘を受けました。

その後、古川商青連会長から今年度の商青連事業の成果と今後の課題を内容とした基調講演そして各委員会の活動報告が成されました。

引き続き各地青年部の活動状況が、土浦・津・津山の三青年部から事例発表していただき、各々地域に於ける青年部として努力されている内容でした。

その後、日商守屋常務の青年部への熱き期待を込めたお話を賜った後、最高の交流の場である懇親会へと移りました。

和やかな会話とともに充実したムードで、瞬く間に予定の時間が過ぎ一日目を終わりました。

二日目は、当研修会最後の事業である分科会が〝青年部、その誇りと悩み〟をテーマに四分科会に分かれ、自由討議で開かれました。平素各青年部の事業の苦労話や、出席率の問題など、「知りたかった、話しをしてみたかった」ことが、生で聞くことができ、分科会報告でも最高の成果であったとの報告が成され、今後益々地域経済の発展に期待とその責を担う青年部として、この中央研修会で得たことを生かされるよう、互いに確信しあい、終了しました。

参加者各位のご理解とご協力で実り多い中央研修会であったことをお礼申し上げ、報告とします。（研修委員長　竹林　武一）

六十三年度役員（敬称略）

▽**会長**　萩原幸昭（福島県原町市）

▽**副会長**　奥田利明（北海道浦河町）菅原周二（宮城県塩釜市）谷川晴久（石川県輪島市）西田晴夫（栃木県足利市）水野直樹（愛知県春日井市）綿谷正之（奈良県奈良市）蒔苗聖一（山口県光市）伊藤剛吉（愛媛県西条市）石川正一（沖縄県那覇市）

▽**理事**　横尾逸郎（北海道登別市）伊藤健（秋田県大館市）鈴木隆則（山形県長井市）中島英一（新潟県村上市）河口清隆（富山県富山市）平松克章（茨城県水戸市）松本耕誌（群馬県館林市）鈴木衛（千葉県市川市）伊藤雅章（静岡県浜松市）深川寛治（岐阜県関市）広森重孝（三重県鈴鹿市）南谷郁夫（福井県武生市）恩地稔留（大阪府枚方市）地村耕一良（兵庫県洲本市）黒崎功（和歌山県有田市）縫谷昌生（鳥取県鳥取市）原光（島根県松江市）津本憲一（岡山県津山市）田澤義昭（徳島県鳴門市）堅田清十郎（高知県高知市）永石政利（佐賀県鹿島市）町田雅之（長崎県平戸市）原田和明（宮崎県日向市）池増徹（鹿児島県指宿市）

▽**幹事**　近藤博昭（埼玉県上尾市）永尾一二（香川県坂出市）

▽**顧問**　馬島伸介（中企部長）

▽**相談役**　曽我隆一（前橋）中山昌男（土浦）古川伸二（福井）

62年度商青連ニュース・ベスト10

1、商青連設立五年目を迎え、スローガン『翔こう商青連、創ろう日本の未来』のもと船出（四月）

2、アメリカ・カナダ視察研修事業成功、多大な成果をおさめ、団員総勢六〇名元気に帰国（六月）

3、商青連加入青年部二〇〇ヵ所の大台突破（八月）

4、第九回（昭和六十四年度）商工会議所青年部全国大会の開催地高知市に決定（八月）

5、各青年部並びに役員の呼称統一化を決定（八月）

6、ブロック運営研究会、全国七ヵ所で有意義に開催――統一研究テーマ「原点を見直し、二十一世紀へ翔く青年部」（五月・八月・九月）

7、紙面増・内容一新で機関紙『翔生』（三・四号）を発行（十月・六十三年三月）

8、六十三年度役員決まる――会長に萩原幸昭氏（福島県・原町商工会議所青年部）（十一月）

9、第七回全国大会（沖縄県連主管）、過去最大の規模（一、六〇〇名参加）で開催（十一月）

10、第五回中央研修会、東京で開催――特別講演に真藤恒氏（日本電信電話社長）（六十三年二月）

（次）初の試みとして広報担当者研修会を熱海市で開催（三十名参加）（十月）

広報担当者が研修
機関紙の役割話し合う
広報委員会

昭和六十二年度の商青連広報活動の一環として、各地商工会議所青年部の広報担当者を対象に、十月五日・六日の一泊二日で静岡県の熱海に於いて三十名の参加をもって開催しました。

一日目オリエンテーションの後、今年度商青連広報委員長より商青連の広報活動について話があり、つづいてサントリー㈱部長、小玉武先生より新しい時代に対応した広報活動の中で「企業経営と広報」と題して講演を頂きました。読者が何を求めているかすなわち読者の立場を理解することが大事であると力説されました。その後意見交換、懇親会に於いても参加者一同掲題についての討議を行ないました。

二日目は総合ジャーナリズム研究所の大内文一先生の会報のつくり方（初級程度）の実務を研修した。広報の使命と、読者にしたしまれる紙面づくりをモットーに基本的なことについての研修を受けた。

この二日間にわたる広報活動全般についての研修は、あらためてその奥の深さと重要性を知ることが出来、参加者全員実り多い研修でありました。（広報委員長　萩原　幸昭）

62年度事業報告
総務委員長　神田博一

古川会長の元での六十二年度事業を振り返って、簡単にご報告を申し上げます。

六十二年度の事業の進めかたは、四委員会で事業計画に沿った議案を審議していただき、その中で重要な案件を役員会に上程し、役員会で討議承認された事業を実行に移すという方法で進めてまいりました。このように行われた委員会、役員会を中心とした主だった事業を列記し、報告にかえさせていただきます。

〔六十二年四月九日〕各委員会・第二十回役員会〔五月二十二日〕各委員会・第二十一回役員会〔六月四日～同十五日〕アメリカ・カナダ海外視察研修〔七月二十一日〕商青連正副会長と相談役との懇談会〔八月三日〕各委員会・第二十二回役員会〔十月七日〕各委員会・第二十三回役員会〔十一月六日〕正副会長・相談役会議・第二十四回役員会〔十一月七日〕会員総会・第七回全国大会〔十二月二日〕各委員会・第二十五回役員会・新旧役員懇談会〔六十三年一月十八日〕各委員会・第二十六回役員会〔二月九・一〇日〕中央研修会・第二十七回役員会・会員総会

以上のほか、各ブロックごとにブロック運営研修会が盛大に開催され、六十二年度事業を余すところなく終了することができました。

心に残る一冊
『危機の哲学』
難波田春夫著（経済往来社）

伊勢崎商工会議所青年部　常任理事　杉原俊夫

私はこの本の始めが大好きである。

「むかしむかし或るところに、ひとりの長者が住んでいた。ある日、その長者の家の門口に、一人の美しい女性が姿を現わした。その名を聞くと、わたしの名は功徳天（ひとびとに幸福をさずける神）であるという。喜んだ長者は、女神を招じ入れて供応をしようとするが、功徳天は、自分は妹を連れているので、一緒に招いてほしいという。

だが、長者の快諾で姿を現わしたのは、ふた眼と見れない醜女であって、しかもその名は、黒闇天（ひとびとに災をもたらす神）であった。驚いた長者は、こちらの方はお断わりというが、二人は承知しない。わたしたちふたりは姉妹であって、別れ別れになることができない。二人は連れ立って歩かねばならない。それでは止むを得ないから、といって、姉妹連れ立って、何処ともなく立ち去って行く……」

これは、涅槃経（ねはんきょう）というお経の中に出てくる説話である。これほど巧みに、われわれ人間の合理的な思惟をこえたところに、ものごとの存在の道理があることを教えるものはないといってよい。

我々は、ものごとを、AはAである。BはBである。というように別個の独立したものと考えて、自分の都合の良い方だけを、選別し得ると考える所に、現代の社会の歪があることを説いている。これは人間の思惟の論理であって、決して実在そのものの論理ではないと。

功徳天だけをねがい、権利と、限りない欲求を求めることにより、技術と産業の無制約的な発達が、空気や水を汚染し、ひいては食料までが汚染されて、このままでは地球は人類が棲息することのできないような場所となるのではないでしょうか。

このように限りなくパイがあると考えての近代は必ず終焉すると述べています。

いまこそ我々若者が、新しい価値観を創造しなくてはならない時ではないかと、この本を読むたびに考え、時代考察のすばらしさと真理のすばらしさを教えるこの本をご紹介いたします。

活力ある観光文化都市づくり

我が町我がビション
活性化への主役を担う

村上商工会議所 青年部

(文・能力開発委員会　佐藤　重陽)

村上商工会議所青年部は、昭和五十九年十月に会員二十五名で発会し、現在四十名で組織している部会です。

我が部会の目的は、青年経営者としての資質の向上と会員相互の啓発親睦をはかりつつ、商工業の振興と会議所の事業活動に寄与する事であります。

ところが、発会当初、我々は商工会議所の事業内容も良く知らず、最初に取りかかった事業が商工会議所についての勉強会でありました。

以後、部会内外を対象とした講演会、販促に関する実務研修等を重ねつつ、市の提唱する基本計画である「創造性豊かで活力ある観光文化都市」に向けて具体的な活動を展開しております。

我が村上市は、米どころ新潟県の最北端に位置し、西は日本海に面して長い海岸線が続いています。東は国立公園飯豊朝日連峰に連なる山々のうねりが眺望されます。市のほぼ中央を流れる三両川（ミオモテガワ）は、朝日連峰に源を発し、上流に位置する朝日村と市の北東部の水田耕地をうるおしながら西に流れ、日本海にそそいでいます。又城下町として栄えてきた村上は日本海に小さく浮く粟島への玄関口として知られる岩船港や瀬波温泉をはじめ史跡や観光資源の豊かなまちです。

現在人口約三万三千、地場産業としては、先に述べたように、海、山、川など自然に恵まれており、お茶、木彫堆朱、鮭漁、地酒、米など豊富に有り、生産額では第三次産業に及びません村上の市民は大事な観光資源にもつながる財産と考えております。特に三面川で採れる鮭については、二百年も昔に、世界最初の自然ふ化増殖に成功して以来、村上に育った人々の鮭に対する愛着と食文化は他に誇れるものと思います。又鮭に関しては行政も力を入れており、昭和六十二年には鮭（イヨボヤ）会館をオープンさせ、三面川の鮭とともに生きてきた人々の暮しぶり、必死になって考案したふ化増殖方法や漁法・漁具、歴史と伝統に培われた鮭料理など村上の鮭文化に関する資料を集めて展示紹介しています。近年併設される鮭公園も全面オープンされる予定です。

私達も観光で訪れてくださった方々の為、又、他の観光施設との関連による「村上のまちづくり」の為の一手法を、提案推進していきたいと考えます。それにより徐々にでもこの地方の産業・商業を育てる事が我々次代の後継者としての責務ではと思います。

青年部が走る

その一端として昭和六十一年度から『何故？観光立市村上』をテーマに村上市の観光について様々な面から調査、研究を開始しました。しかし、六十二年度に北陸信越大会を当村上市に於いて開催する事に決定され、主管青年部と相成り途中中断され、いまだ報告・提案に至っておりませんが、近い将来には第一段階としての報告が成されるものと信じております。私達にとって大事な事業が一つ遅れてしまったということはありましたが、北陸信越大会の主管が決まり開催までの一年間の準備の間、別な角度からの村上を知った思いがします。

観光を唱えている私達自身、大きな大会に集まって来られる方々をどうお迎えしたら良いのか考えた時に頭を抱える点もいくつかありました。

村上市には瀬波温泉がありますので宿泊は三千人位までなら心配ありません。しかし一堂に会する場所が無く、老朽化した市民会館を使用しなければならない。これからの瀬波温泉などの宿泊施設を活かすには、様々な大会、会議などにも応じられるようなホール等の施設が重要でないかと感じました。せっかくの宿泊施設も季節旅館であっては、投資資本の割に回収が容易ではなく、結果観光ホテルとしては料金の高い物になり、来られる方が限定されてしまいはしないかなどの心配があります。

また、お迎えする私達自身の問題として、村上市及び近郷の観光施設と歴史などの資源に対する知識が乏しい。これは観光文化都市村上を支える一員としてはずかしいことであり、市民一人一人が遠来の人をお迎えできるよう知っておく必要があるのではないでしょうか。「訪ねてよいまち村上」を皆さんにあじわっていただいてお送りする、そんな観光を楽しんでいただくには施設だけでなく、迎える側の気配り知識というものも欠かせないものと思います。

私達の青年部の事業として、もう一つ大事な事業があります。それは『サマージャンボリーイン村上』です。これも村上の観光を意識しての事業ですが、瀬波温泉の浜辺を利用してのイベントです。昭和六十一年八月に第一回を開催してまだ二回という実績しかありませんが、県内外の会議所、ラジオ放送などのご協力を得て、参加者も百名位あり大変な盛り上がりをみるに至りました。このイベントは村上を知ってもらう機会として開催したものですが、皆さんにヨット、ウィンドサーフィン、水泳などの海浜スポーツやゲームを楽しんでいただくというものです。第一回の時は、予算を考えずに走りすぎ、大赤字という商工会議所青年部が運営だったにしては、はずかしい事業結果でしたが私達の当初の目的は充分に達成する事が出来たと満足しております。また、参加者の喜ぶ顔々をみていると一回ポッキリの事業に出来なくなり、二回目は家族客をも対象に含め開催するに至りました。

なにやら走り走りの村上の紹介、当青年部の紹介となってしまいましたが、私達もまだ歩き始めて四年目の青年部です。近い将来村上市で全国大会を開催し、皆さんと語り合える事を楽しみにしております。それが当青年部の成長であり、村上市の発展であると確信しております。

我がふるさとの現状と課題
まちの将来は青年部の飛躍がカギ

佐賀県鹿島商工会議所青年部
直前会長　滝本　竜也

この佐賀県鹿島市は人口三万五千余り、私の所属する鹿島商工会議所青年部は鍋島支藩の城下町、祐徳稲荷で有名で、西と南に藤津郡があり、東には陶工と焼物の町、そして温泉町嬉野があり、南下すれば有明海と多良岳の太良町、東は有明海、西は山岳地帯に面した伝統ある歴史文化に育くまれた民情豊かな市です。

私共青年部も設立して六年目を迎え、一昨年五月は、第六回九州ブロック大会を主管しました。ようやく歩き始めた時期であり、会員の意識も低く、九州大会の認識も低く、成功するかどうか疑問視したものでしたが、二十一世紀の理想を実現する為、又身近な地域づくりのため、あのままの鹿島をみていただいて今後の青年部としての会員のレベルアップを図るために開催したのでした。

鹿島の現状については、産業面では農村水産の第一次産業が主体で、生産の面からいえば農業については、従来の米麦中心から、みかん・畜産・野菜などに多様化と、経営の複合化の方向に進んでいるわけですが、農産物の全国的な過剰のために、また、産地間競争のために、価格が低迷し、生産性が上らず停滞ぎみであります。

また、水産の方面でも、その殆どを海苔に依存しているわけですが、最近、価格変動が激しく、また、設備投資等のために、大変苦戦をしているのが現状ではなかろうかと思われます。

一方、工業のほうは、企業数、従業員は横ばいであるが、生産は比較的順調に伸びています。商業はというと、売上げは少々伸びてはいるというものの、一店舗当り、また、一従業員当りの売上げは、県の平均より低いわけです。

観光面につきましては、鹿島の誇ります祐徳稲荷に年間三百万人に満たんとする参拝客があるわけですが、参拝を終ると温泉の町、嬉野・武雄に行ってしまって、そこで宿泊をするというのが現状であります。

その結果、鹿島市内に落ちるお金は、わずかな金額になっていると思われます。また、人口の方も十年前と全々変動がない状態が現状といった所です。

こういう産業の面から把えてみても、いずれも、まあまあ良いか、或いは良くないという現状です。都市基盤という観点（特に交通体系）から、現状或いは将来を見通してみますと、残念ながら、お先、真暗になります。

第一、新幹線も高速道路も通りません。バイパスにしてもいつのことになるか見通しが立たないのであります。

こういう鹿島の現状と将来というものを考えあわせてみますと、もし、このままの状態で進んでいたら、鹿島は他の町から取り残されてしまうのではないかと危機感を持たざるを得ません。

村上の観光をアピールする「サマージャンボリー村上」は大成功！

鹿島市は祐徳稲荷で知られる

若手経営者に期待する

名古屋商工会議所会頭
竹田　弘太郎

全国商工会議所青年部連合会が年を追って組織を拡大され、また活発な活動を通して大きな成果を挙げておられますことに対して、先ずもってお喜びを申し上げます。

ご高承のとおり、わが国経済は、産業界の血のにじむような努力に加え、政府の積極的な財政政策の効果もあって景気は内需を中心に漸く緩やかな回復の方向にあると存じます。しかしながら対外経済摩擦の激化、幾度か押し寄せる急激な円高の波、さらには産業構造の転換等々、その経済環境はまことに厳しい状況にあります。

一方、経済のソフト化、情報化の進展、著しい技術革新等新しい時代のうねりは、これまた大きなものがあります。

こうした厳しい環境変化の中で、企業があらゆる経営困難を克服しながら力強く発展していくためには、若手経営者の皆さんご自身も、経営者としての先見性と決断力、情報収集力などに一層練達され、積極的な事業展開を進めていかれることが肝要であると存じます。同時に豊かな国際感覚を培っていただくことも、これまた大切ではなかろうかと存ずるのであります。

国際化は、これからいやおうなく広がっていきます。とくにモノから心へと時代の流れが大きく転換を遂げている今日では、それぞれの国の文化ということにまでは違った側面を理解することによって、真の国際化は進展していくからであります。

日本もこれまでのように単にモノだけを輸出するのではなく、日本古来の文化やそれぞれの地域のもつ〝日本の心〟を輸出する気配りをしていく、このことは世界から尊敬される日本・日本人になっていくためのきわめて大切な要素であります。モノ偏重から脱脚し、若い皆さんにはぜひこの一翼を担っていただきたいのであります。

いま一つ、新しい事業分野の開拓にも果敢に挑戦していただきたい。現下の厳しい環境のもとで、多くの企業が懸命に活路開拓、構造転換に取り組んでいます。同時に、モノやサービスを提供する企業群が従来の業種のワクを越えた業際的分野へも盛んに進出しております。そこにはニュービジネスが登場し、さらに異業種交流によって新しい技術、新製品が生まれ、ビジネスチャンスを活かして事業を大きく発展させている人達も多くおられます。

皆さん、もう一度起業家精神に立ち返って、創意工夫と発想の転換で新しい事業分野を切り拓き、ぜひともこの厳しい時代を乗り切っていただきたいものであります。このことは異業種交流を手法により入れ、実践的な経営学習でやっている新世代経営者集団「名古屋商工会議所若鯱会」の皆さんにも機会あるごとに申し上げ、激励しているところであります。

幸い、全国商工会議所青年部連合会は、全国に拡がる強力なネットワークを形成され、参加メンバー全員がきわめて意欲的な方々ばかりと伺っております。若者の結束は大きな力であります。このパワーを生かし、活動を通じてなお一層お互いの交流と研鑽を深められれば、地域はもとよりのこと、わが国経済の進展を力強く支える担い手になるものと確信いたします。

どうか皆様におかれては、商工会議所との連携をさらに深め、地域の活性化、産業の発展、文化の振興に二尽力下さるよう期待する次第であります。

懇談

萩原63年度商青連会長

六十三年度商青連会長の萩原孝昭氏（現広報委員長）は、長谷部誠広報副委員長、古賀友一広報委員とともに、二月十日、通産産業省に田村元（はじめ）通産大臣を訪ね、商青連会長就任のあいさつをするとともに、通産産業行政について田村通産大臣の所見を聞いた。

田村通産大臣は「我が国の経済社会が厳しい時期だからこそ、次代の日本経済を担う商青連の皆さん方に頑張っていただきたい」と三氏を激励した。通産大臣の所見は以下次のとおり。

今日の世界経済は、依然として多くの難局に直面している。不安定な動きを見せた為替・株式市場、依然高水準にある日米両国の対外不均衡、衰えを見せない欧米諸国における保護主義圧力、引続き深刻な状況から脱出できない累積債務問題等々、克服しなければならない課題が山積している。このような困難な局面を打開し、世界経済の創造的発展を図っていくためには、先進諸国が国際的な政策協調を行い、為替レートの安定に努めるとともに産業政策、マクロ経済政策など多角的な政策対応を行っていくことが不可欠である。また、世界のGNPの一〇%以上を占める我が国としても、世界経済の運営においてその地位にふさわしい積極的な役割を果していくことが求められている。一方、我が国経済社会は、景気は着実に回復しつつあるものの、輸出型中小企業、とりわけ輸出型産地、企業城下町等の景況は依然としてはかばかしくなく、また、今後の為替レートの動向如何では我が国経済に深刻な影響があらわれることも懸念される。さらに研究開発、人材育成、知的サービス等産業の頭脳部分の東京への一極集中が加速されつつあり、東京とその他の地域の経済社会格差が拡大しつつある。さらには昨今の急激な円高の結果、ドル表示での日本の一人当たりGNPは、米国を上回るものになったといわれているが、数字に表される経済力と国民の生活実感には大きな隔たりがあるという現実が厳然と存在している。

田村通産相

また、中長期的には、我が国経済社会は、国際化、技術革新や情報化の飛躍的な進展、国民の価値感の変化、高齢化等を始めとする社会の成熟化等その基本的構造に変革をもたらすような広範かつ多様な変化の中にある。

こうした中で、今後の通商産業政策の重要な課題は、内外の経済環境の変化に的確に対応しつつ、二十一世紀に向けて我が国が新たな自律的発展を遂げていくための基盤造りを進め、これにより国民一人一人が豊さを実感しうる社会を築いていくことである。

このような認識の下に、私は諸施策を強力に推進し、ことしが我が国にとって希望に満ちた飛躍の年になるよう全力を尽くしたい。

内需拡大について

第一に、当面の経済運営について、持続的な内需拡大を図っていく。現在の景気の回復は、内需の着実な伸びによるものであるが、この傾向を定着させていくことが重要である。このため、内需主導型の高めの経済成長を持続するように、公共投資、民間活力導入等により内需の拡大を図り、もって、円高デフレの克服、我が国の大幅な対外不均

地域経済活性化と中小企業

日刊工業新聞社　紺野　寛

異業種の連携で活路を切り開く

年初から円相場は、乱高下気味に推移。派乱含みの龍年経済を思わせる幕開けとなった。日米経済摩擦を回避しようという内需主導による景気回復が、ようやく浸透してきたようだ。全国的にみると、今年の地域経済は、景気の拡大基調にあるものの、一部には産業構造の調整が進まず、跛（は）行状態から依然抜け出せないところもある。一方で、東京への激しい一極集中が地価高騰を招いて、経済にヒズミを生んでいるのも確か。東京集中から地方分散が叫ばれている折、地域経済を振興し、地方に活力を持たさなければ、日本全体の活力が失うことになりかねない。そこは地域の中小企業が、異業種の連携で活路を切り開くチャレンジ精神が求められる。

竹下首相は、昨年十月、「ふるさと創生論」を引っ下げて政権の座についた。このふるさと論は、日本のみならず、世界をも視野に入れ、二十一世紀を展望した幅広い政策になるとうたっているが、しかし、その中身になると抽象的。〝心の通うふるさと〟とはいえ、心が通うだけでは、経済発展、景気浮揚は望めそうもない。こうした中で期待されるのは、国土庁が進めている定住圏構想。

地方の魅力引出す町創り・地場産業を

定住圏は、第三次全国総合開発計画（略称＝三全総、五十二年策定）で、歴史的、伝統文化に根づいた自然、生活、生産の調和した人間居住環境をつくり、大都市の人口と産業を抑制するために、地方に新しい生活圏をつくるという構想。この構想で、いわば〝地方の時代〟の地域活性戦略が展開されているものの、それでも国土庁の調査では、地域の経済力は、まだまだ弱く、このままでは衰退が進む、と指摘されている。それだけに、地方の魅力を引き出す町づくりや地場産業が一層強調されている。昨年春、決定した四全総でも東京の一極集中を是正する多極分散型国土の形成、つまり定住圏域を単位とした地方都市の活性化が打ち出されている。

これとは裏腹に、この二・三年、金融化、情報化の進展で東京にオフィス機能が集中、この結果、オフィス不足を映して地価高騰を招いた。ようやく沈静化の兆しをみせているが、この影響が首都圏の外周部の住宅地へと波及している。

中小企業の草の根ベンチャー精神

東京圏の一極集中に対し、地方の産業の見直し、地域の特色を生かした資源活用などが叫ばれるゆえんだ。しかも都市の集中と地方の過疎化は、地域間格差を生むほか、北海道や九州などの産炭地域、鉄鋼・造船などの企業城下町、円高の影響をモロに受けた地場産業を抱える地域は、その衰退の様相が著しい。当然、雇用の吸収と地域経済の衰退を防げるかどうかは、地域の死活にかかわる問題といってよい。

地方公共団体や自治体などで、最近、奇抜さやアイデアだけで村おこしにかける傾向がうかがえるが、これだけでは限界があり、経済基盤が確立しない。地方定住構想が、急激に人口の集まる東京の機能集中排除の受け皿とするには、地域の特性と市場をにらみながら、採算ベースにもっていく産業の方向づけ、人材育成、技術活用などが必要となってくる。

又、そのうえただ単に、地域の商店街づくりや地場産業の振興にとどまらず、広く地域の生活文化全体を含んだ新しい地域づくりの概念が要と思われる。これは、個別企業のレベルを越えた地域ぐるみの戦略とえよう。大分県の一村一品運動、沖縄県の島おこし運動、各地の街づくり、村おこし運動など地域産業振興の運動が、広い範囲に普及しているが、これらを支えているのは、中小企業の草の根的なベンチャー精神であろう。

中小企業庁の融合化対策

地方の中小企業にとって、生き残り策は、個人の企業努力もあるが、何といっても、異業種企業の交流による新分野開拓だろう。むろん、国の施策、支援があれば、よりうまくいく。六十三年度予算接衝で、最後まで残ったのが通産省中小企業庁による融合化対策。ようやくギリギリの段階の大臣接衝で二十二億四千万円の予算が復活した。新分野開拓は円高の定着やアジアNICS（新興工業国）の追い上げで今や「待ったなし」。それも構造転換にいち早く乗り出さなければならないからだ。

大企業に比べ、中小企業は、事業分野が狭く、技術力、マーケティング力、資金力などで相当ハンディを背負う。そこで通産省中小企業庁は法制（中小企業事業融合化促進措置法＝仮称）を軸に、一般会計、財政投融資、税制面など各種政策手段を幅広く取り入れ、総合化を図ることとした。この政策は、技術、市場分野の異なる中小企業が集まって、新しい事業機会を見つけだすのが目的。

すでにこのような時代を先取りした異業種交流グループは、産業の集積する関東、近畿、中部だけにとどまらず、全国的な広がりをみせ、業種の結びつきも、製造業と製造業、製造業と流通業、製造業とサービス業など多彩な展開が図られており、中小企業庁によると、そのグループは約八百グループに達し、企業数にしてざっと二万三千社にのぼるという。今後も一年に百五十グループの割でふえるとみている。

融合化対策の中身は、三段階に分かれる。第一に、異業種企業同士がコンタクトできる〝座敷〟を作り、第二にこの中から共同で技術開発や事業を試みようとするグループに対し、補助金や所得控除面で支援する。第三に事業化の段階で、高度化無利子融資などで助成する、といった具合。こうした融合化対策が加わることで、異業種交流による新分野開拓は、一段と弾みがつくのに違いない。これがひいては、地域の活性化につながると期待されるのである。

言いかえれば、定住圏構想にしろ、四全総にしろ、新産業都市にしろ、このような、いわば国、政府による地域づくりより、むしろ地域から出発した自発的な地域づくりが求められる。その意味からすれば、地域住民のコンセンサスを形成し、地域の生活文化を踏まえた創意工夫が大切なことはいうまでもない。

田村通産大臣と

衡の是正及び経済の持続的発展を図っていきたい。

世界経済の貢献

第二に、世界経済の創造的成長への積極的な貢献である。世界経済において枢要な地位を占めるに至った我が国としては「世界の中の日本」という観点から、世界経済の持続的成長に積極的に貢献していくことが求められる。

国内的には産業構造の輸出依存型から内需依存型への転換努力を継続しつつ、対外的には、国際的な政策協調を一層推進するとともに、二十一世紀の世界経済における自由貿易体制の維持、強化のためガット・ウルグアイラウンドを中心とした新しい貿易の枠組み作りに、積極的にイニシアティブをとっていく。

田村通産大臣を囲んで　左から古賀広報委員、長谷部広報副委員長、田村通産大臣、萩原63年度会長（通産大臣室で）

地域の活性化

近年の経済の高度化、ソフト化の進展により、研究開発、商品企画、情報処理等のいわば「産業の頭脳部分」の我が国経済における重要性が益々増大しつつある。このような産業の頭脳部分は、東京圏への一極集中の度を強める傾向にあり、このことが東京圏における土地問題の一因をなすに至っている。今後、地方の経済圏が産業構造調整に円滑に対応しつつ、その活性化を図っていく上において、「産業の頭脳部分」を地方の拠点に集積させることが重要な鍵になると考える。通産省では工業団地・工業用水道等の産業基盤整備や工場の地方分散を中心とする従来の産業立地政策による地域活性化策とともに、新年度予算で新たに認められた一連の政策手段を駆使して、東京圏への過度の機能集中を是正し、「産業の頭脳部分」の地方分散を実現していく。

中小企業施策の展開

我が国経済が活力を保ちつつバランスのとれた経済発展を続けていくためには、中小企業がその機動性を活かして内外の環境変化に対応し、新たな事業分野の開拓により、更なる発展を遂げていくことが不可欠である。

異分野の中小企業が結びつき、互いの経営資源を提供しあって新事業を開発するいわゆる「融合化」の促進を図るとともに、事業転換対策・特定地域中小企業対策等の拡充・金融・信用面、人材面、技術面・情報面等における経営基盤の充実、小規模企業対策など総合的な施策の展開を図っていく。また、創造的飛躍を目指した技術開発の推進、中長期的観点に立った資源エネルギー政策の推進なども重要な施策である。さらに我が国の経済力を真に豊かな国民生活の実現に向けて集中していくため、引続き円高差益の還元に積極的に努めたい。

私の生きがい論

夢中と感動の日々を

津山青年部　萬代　雄一

津山という中国山脈に囲まれた静かな城下町で、建築設計に従事している。ある住宅設計の仕事で「会社を退職するので家を建てたい」との事。私がその設計をさせていただいた訳だが、その工事のほとんどを「自分と女房と二人でやろうと思います」との話であった。長く勤めた会社をめでたく停年退職し、子供も育て、後は自分達の手で家づくり。そのほのぼのとした考え方に賛同し、おそらくこの施主様、私の設計図を大事にしてくれる施主はいないだろうなと必要以上に細かな所まで設計図に書き表わした。おそらく、この人にとって新しい生き甲斐であろう。

様々な人達との対話の中から新しい刺激を受ける事は、私にとって最大の楽しみである。建築設計という仕事の関係上、人と深くつきあう機会が多い。対話の中から、相手の考え方を聞き、私なりの主張を交えながら仕事を進めていく訳だが、相手方がどれだけ理解できているかが重要なポイントである。

住宅が人づくりの場であるならば、ビル、店舗建築は街づくりの場である。青年部の活動とほぼ同じ主旨の仕事で、その社会的な意義については、重要な分野であると思っている。

津山の青年部が特に『イベントを通じての街づくり』という点を重視し、様々な活動を行っているが、私はそれを自分の仕事と同じ感覚でとらえている。

イベントが地域に与える影響は大きい。街のイメージを決定する程であると考えている。一つのイベントが街へ活力を与え、生きる楽しみを増してくれる。その中にその地域自体が持つ独自の風土、文化等が演出できれば、地域の人々に大きな感動を与える事ができる。

地域に根づいたイベントは、まさに街づくりそのものである。街は日に日にその姿を変えている。行政サイドの都市計画に基づく建設工事もあれば、新しい商店がオープンしたような細胞分裂的な出来事事まで、確実に変貌している。

イベント等の時には街は、大きく自己主張しているように見える。呼吸しているよう言っても良い。その大きな渦の中に、我々は生活している訳だが、中に住む人のとらえ方も様々である。

生き甲斐も多種多様。何事にも夢中になれる人は、生き甲斐も多いし、感動も多い。仕事、趣味、青年部活動を問わず夢中になれる精神状態を保つ事が大切であると思う。人生の中で今でしかできない事は数多くある。後になって「あの時こうしておけば…」と悔む事が一番恐しい。私にとって何が生き甲斐であると言うより、何事にも、夢中になり、感動の多い毎日を迎えたい。

私の青年時代

どん底の生活から仕事に立ち向かっていった

大阪油化工業㈱
代表取締役社長　堀田　巍

私は、昭和四年三月桜島尋常高等小学校高等科を卒業、家庭の事情が上級学校へ行かせてもらえるだけの余裕などないことを知っていたので、高等科を卒業すれば、社会に出て金儲けをするのだ、と決めていた。

しかし、運の悪いことに、当時の経済情勢は、長期不況がますます深刻の度を加えていくため、引続き円高差益の還元に積極的に努めたい。

と言った。大阪鉄工所といえば、三菱造船所と並ぶ我が国を代表する造船会社の最大手である。

折からの深刻な不況で、これといった就職先もあるわけでなく、父の勧めるまま、この大阪鉄工所を受験することに決めた。

受験生は、全国各地から集まり、競争率は十倍を超え、学業には自信はあったが、さすがに緊張したのをいまでも憶えている。

その数日後、試験結果が発表され、私は二番の成績で合格できた。両親は、この合格通知に、大変喜んでくれた。

こうして大阪鉄工所の職工訓練所の受験に成功、二年間の見習工としての生活が始まった。午前中は、普通の学校のように教室で一般教養の授業を受け、午後は現場で実務の教育を受けた。給料は、一日六十銭。機械の最終工程であるヤスリの合せなど機械の仕上げとしての技術をマスターした。ここで身につけた仕上工としての技術が、のちに私の一生に大きくかかわるとは、思いもよらなかった。

給料が少し上がって一日七十銭くらいになっていたが、父は仕事もなく、一家の生活は苦しくなっていた。私が一ケ月まるまる働いても、月に十九円、これで両親やまだ幼い妹弟の面倒をとても見ていくことはできず、兄からの要請もあって、一家で当時九州の若松市で働いていた兄の一郎のもとへ引っ越すことになった。

しかし、兄を頼って北九州の若松へ行ってはみたが、深刻な経済不況からどこを探しても仕事らしい仕事は見当たらないまま、親子五人借家生活が始まった。

とにかく職がない暮らしは大変で、やむなく私だけが、単身で大阪へ引返すことになり、職探しに走り回った。

しかし、大阪とて同じことで、まともな仕事は見当たらなく、今度は食堂の見習コックとして働くことになった。

「せっかく、機械の技術を身につけた俺が、なぜ、こんなことをしなくてはいけないのか」と、何度も思った。これも長続きせず、しばらく後に辞め、次は、町の鉄工所で働き始めた。

この頃、生活はまさにどん底の状態であった。町の工場で働く一方で、職業安定所へ出掛け、仕事探しにも精を出していた。その町工場に勤めていた頃、住友製鋼所へ仕事に出掛けた時、そこの職長さんから

「どうや、住友で働かないか」

と、声がかかり、入社することになった。

新天地

私は、まさに新天地を得たかのように、一生懸命に仕事に取り組んだ。大阪鉄工所時代に身につけた機械の仕上工としての技術は、ここで高く評価してもらえた。何より会社全体が活気に満ち溢れていた。

この時、二十歳の私は、どん底の生活に追いやられ、九州から大阪と、渡り歩いた青春時代であったが、いまにして思えば、必死になって生きてきたという悲壮感より、むしろ、深刻な不況に苦しみながらも一家の大きな支えとして、親、妹弟のことを考えながら仕事に立ち向かっていった充実した時代であったように思う。

昭和七年ごろ日本は、満洲事変勃発を契機に、極端な国家主義の方向に進み、産業部門では、重化学工業の比重が著しく高まり、日本経済は、この時期を機に、軽工業中心から重工業中心へと、質的に転換していったのである。

鉄鋼系も暗い不況から解放され、住友製鋼所は、主として満洲の交通開発に対応する鉄道用品生産の拡張に力を注いでいた。

昭和十四年十月には、満洲住友金属工業奉天新工場が操業を開始した。二十二歳の若さで満洲奉天工場勤務を命ぜられ、私は、日本を離れることになった。

奉天で四年間の生活は、私にとって、まさに波乱に富んだ経験をすることになる。

仕事も結構忙しく、私の部下に三十人ほどの日本人と、二百人近い満洲人がいて、彼等に作業の指示をしていた。

奉天に来て三年余りたったある日、請負師風の男が、私に近づいて来て、

「どこにお勤めですか」

と話かけてきた。

「住友製鋼所で機械の据付をやってますねん」

と気楽に応じたところ、

「実は機械の据付をやってもらいたいのですが」

と言うのである。もちろん、一度となく二度、三度と断ったが、そのうち、自分の力を試す大きな機会がきた、と思うようになった。

この仕事に運命をかけてみよう、と決意し、会社を辞めて新京へ向けて出発した。

ところが、運悪くノモンハン事件（モンゴル人民共和国との国境で一九三九年日ソ両国が国境紛争で交戦、日本軍大敗）が勃発し、機械据付請負業も失敗に終り、帰国した。

波乱万丈の青春時代が続いたが、私は、母の勧めで昭和十六年、二十七歳で結婚、細々と鉄工業を営んでいた年、日本は第二次世界大戦へと突入、戦火も激しく、次第に生活も厳しくなった。やがて日本は、敗戦の色が濃くなり、昭和二十年終戦となる。

廃墟の中での生活が始まり機械の修理に明け暮れた。

ある日、共栄社油脂化学工業の松田技師との出会いで、機械とはおよそ関係のない化学の世界へ第一歩を踏み出すことになった。

最初に手がけたのは、松田技師の勧めで、ロウソクの原料パラフィン精製の仕事で、昭和二十四年大阪油化工業のスタートとなった。

以降、多くの人との出会いがあり、昭和二十五年にはクレゾール酸の蒸溜を本格的に開始、企業化に成功、さらに企業規模を拡大し、現在ではクレゾール酸、石炭酸の精製をはじめ、粗タール酸の蒸溜にも着手、各種合成樹脂の製造、高級アルコール工業用試薬の製造と、営業品目を拡大し、創業三十八年にして蒸溜専門メーカーとして、他の追従を許さない発展を遂げるまでに至った。

私は、七十二歳を過ぎたとはいえ、まだ前向きに生き続け、この会社の進路を見守るつもりであり、特に人生を振り返れば、波乱含みの青春時代が強く思い出されるのであります。

青年部設置状況 (63.2.8現在)

488商工会議所のうち、296会議所に設置　(設置率　60.7%)

ブロック名 青年部数 (会議所数)	設置率	全国商工会議所青年部連合会に加入している商工会議所青年部名 (207)
北海道 9 (40)	22.5%	美幌、浦河、登別 (3)
東北 34 (42)	81.0%	青森、一関、花巻、北上、江刺、久慈、仙台、塩釜、石巻、気仙沼、白石、秋田、大館、山形、酒田、鶴岡、米沢、新庄、長井、福島、郡山、会津若松、いわき、白河、原町、会津喜多方、相馬、須賀川、二本松 (29)
北陸信越 30 (49)	61.2%	新発田、燕、村上、五泉、亀田、富山、高岡、氷見、新湊、魚津、礪波、滑川、黒部、七尾、輪島、下諏訪、塩尻、中野、松代 (19)
関東 62 (92)	67.4%	水戸、土浦、古河、日立、石岡、下館、那珂湊、結城、勝田、足利、小山、真岡、前橋、桐生、館林、伊勢崎、富岡、藤岡、川口、大宮、本庄、与野、上尾、銚子、木更津、市川、茂原、野田館山、八街、東金、柏、横須賀、小田原、厚木、秦野、鎌倉、三浦、相模原、静岡、浜松、沼津、清水 (43)
東海 17 (43)	39.5%	関、恵那、蒲郡、春日井、津、伊勢、鈴鹿、尾鷲、熊野 (9)
近畿 41 (67)	61.2%	福井、敦賀、武生、勝山、鯖江、彦根、草津、守山、舞鶴、福知山、綾部、宮津、亀岡、城陽、泉大津、北大阪、守口門真、高石、箕面、洲本、高砂、龍野、小野、奈良、生駒、海南、田辺、橋本、紀州有田 (29)
中国 31 (50)	62.0%	鳥取、米子、松江、浜田、出雲、平田、益田、大田、江津、津山、下関、宇部、山口、徳山、下松、萩、岩国、山陽、長門、光、小野田、小郡、柳井 (23)
四国 26 (29)	89.7%	鳴門、鳴島、阿波池田、阿南、高松、丸亀、坂出、観音寺、多度津、善通寺、宇和島、八幡浜、新居浜、西条、伊予、大洲、東子、高知、中村、安芸、須崎 (21)
九州 46 (76)	60.5%	八女、豊前、行橋、筑後市、宮田、甘木、伊万里、小城、鹿島、長崎、島原、諫早、大村、福江、平戸、別府、大分、日田、佐伯、臼杵、津久見、佐賀関、豊後高田、竹田、日向、高鍋、指宿、串木野、那覇、沖縄、沖縄宮古 (31)

女性オーナーいんたびゅー

ナオクロスシステム社長 牛久　直子さん (栃木県)

夢を創り、夢を売る「ナオコ」毎日が充実

繊維のまち足利市は、縫製業者ひしめく町。「かかあ天下に空っ風」とは女性がよく働く形容の言葉でもある。フツーのおばさんが一念発起、会社のオーナーになってしまった。

—会社設立のきっかけは何でしょうか。

牛久　結婚するまでまったく会社勤めの経験もありません。それがマイホームという夢を実現するため会社勤めや内職をしたりということから、たった五人でスタートしたのがきっかけです。

—現業の内容と今後の計画をお聞かせ下さい。

牛久　現在は原宿に本拠をおく小売店のヤングファッションを中心に縫っております。今日縫った品物が明日には店頭に並ぶという、毎日が戦争です。夢を創り、夢を売ることに毎日が充実しています。今後は自分のブランドをデザインし「ナオコ」を大いに売り出そうと企画しています。

—女性経営者としての気苦労などございますか。

牛久　私の所ではほとんどが女性、それも主婦ですので出勤は午前九時。また年上ばかりなので家族的な会社を心掛けています。そうすることで協力度合が違うようです。世間的にも女だから、若いからといった信用問題もありますが、女性の方が細かい神経を使えるという点にあると思います。

—事業と家庭の両立は難しいと思いますが。

牛久　私は仕事をしているのではなく、仕事をさせてもらっていると考えています。家庭はあくまで主人に食べさせてもらっているのだと。でも、子供をあずけてまで仕事をしていると言われるのが一番つらいですね。(笑)

—同じ道を歩もうとしている人に何か助言を。

牛久　私がこの業界に入ったきっかけは、何らかの収入と好奇心からです。一時期没頭しすぎて会社が危機に瀕したこともありますが、最初から儲けでやっていたらだめだったと思います。利益を忘れさす好奇心も時には必要だと。

—ところでマイホームはどうなりましたか。

牛久　やっと土地を購入し、完成しました。

—どうもありがとうございました。

彼女のプロフィール

昭和二十六年、栃木県足利市生まれ。おうし座。足利高等学校卒業後、家事手伝い。二十三才で結婚。マイホーム実現のため家庭内職をきっかけに昭和五十七年、同社設立。

現在、年商一億五千万円。総勢五十名を率いる女性オーナー。また家庭ではサラリーマンの夫(四十才)、長女(小学六年)、長男(四才)の良き母でもあり、この五月には第三子誕生の予定。

一期一会

心のふれあいがなければ人の良さは分からない

鈴鹿商工会議所
青年部会会長　広森　重孝

鈴鹿商工会議所青年部の会長をお引受けして半年になろうとしています。

鈴鹿市は昭和十七年に、二町十二ヶ村が軍の力により合併されて出来た市です。現在では、人口十六万三千人、三重県下では四日市に次ぐ人口規模となりました。農業生産高は三重県第一位、工業生産高も本田技研を中心に県下第二位と躍進を続けています。全国的にも鈴鹿サーキットが有名で年間三百万人もの人が訪れるそうです。八時間耐久レースも十年の歴史を重ね、若人の文化として定着してまいりました。又本年はFIレースが開催されるということで、市も国際都市構想を打ち出し受入れ体制の整備に動き始めました。

市民あげての歓迎運動ということで、我々青年部もお手伝いをさせていただいています。

このように書いてみますと国際都市、青年部とバラ色の市であるように思いますが、実際には幾多の問題をかかえています。一番大きな問題としては、市の出来たおいたちにも関係するのですが、各町に分かれていて、核になる中心部が存在しないという事です。鈴鹿市の玄関口としての神戸、本田技研を中心としたの若者の町である平田、この三つの核がそれぞれ独立していて、機能的に結合されていません。こういう事から商業集積はいたって小さく、商業販売額においては県下第四位、人口一人当りの販売額では県下十三都市中八位という状況です。

このような市でしたので、鈴鹿市全体の将来を考える会を作ろうという事で十一年前、商業者の若い人達が中心となって、鈴鹿商業青年部が結成されました。昨年は色々皆様にもお世話になり、設立十周年記念式典を開催する事が出来ました。記念講演には、岡田卓也氏をお招きして色々勉強させていただきました。また、十周年を契機に工業委員会が結成され、名実共に商工会議所青年部として生れ変りました。

現在は会員数も六百名を超え、鈴鹿市の将来を担う組織として、やっと認知されました。そういう意味で、大変な時期にあるわけです。そんな時に会長を引き受けて、内心は不安で一杯でしたが、とにかく精一杯やって見よう、という気持で、断涯を飛びおりる気持で受けました。

ところが、色々な事業を進めていくと、思ったよりも上手に事が運んでいくようで驚いています。先日も初めての試みとして移動例会を開催しました。滋賀県のセキスイハウスの工場見学、びわ湖畔で昼食、石山寺を参拝して帰る一日旅行でしたが、工業委員会の方々が全て企画、運営をしていただき、バスの中では色々と話に花が咲き、実に楽しい、有意義な行事となりました。

また、親睦委員会にお願をして、四日市、桑名の商店街連合会青年部との初めての交流会を開催、約八十名の参加で親睦ボウリング大会が行われ、優勝トロフィーを鈴鹿がいただきました。その後の懇親会では、次回は必ず鈴鹿が主催してやりますからと、初めて顔を合わせた人達と、こんなにもスムーズに打解け合うのかなーと思うほど熱気あふれる若人の集いでした。

これから、地域行事委員会による「すずかまつり」があり、例会委員会による奥様昼食会があったり、行事が目白押しですが、きっと素晴しい行事が展開されるでしょう。

私の事業は小さな、ベビー用品店で、従業員も少なく、全て自分で考え、決断し、実行しなければ会社は回っていきません。ところが青年部の色々な事業は、各委員長さんたちが責任をもって委員会を上手に運営していただいております。実に頼もしい人達です。それぞれに意見の違いはありますが、出来る、出来ない、やる、やらない、など活発な討議が行なわれ、決った事は必ず協力していただけます。

こんな意味で一人一人を知ると、鈴鹿には、こんなに素晴しい人達がいたのかと、そのつど感動させられます。今まではそんな人達のお顔を知っていても、心の触れ合いがなければ、人の良さなんて、分らないものなんだなあ、と今さらながら知らされました。

今年は青年部の会長を引き受けた事により、益々、人との出会う機会も多くなる事と思いますが、今後も人との出会いを大切に、一刻一刻を真剣に自分の心に触れていきたいと思います。企業の中でも、どうしても外に出る機会が多くなるのですが、なぜか従業員の人達が一生懸命やってもらえるような気がします。そんな、こんな、自分ですが、二度とない青春、自分の思っている事を精一杯、やってみて、自分を、みがいてみたいと思う今日このごろです。

編集後記

冬季カルガリーで黒岩選手が銅メダル。寒い日本列島に暖かい便りが届いた。その頃、本紙の編集もラストスパートに入った。しかし、思うように編集作業は進まず、天を仰ぐことも、ばしば。

しかし、古川年度会長のフィナーレを飾るべく全力投球、何とか校了に漕ぎ着ける。

今回の編集を通して、各地の青年部の活動が地域の特性を活かした事業展開であることを知り、活動の仲間として同志が頼もしく見えてきた。また、日本列島の広さをあらためて知ることができた。

全国から多くの同志の寄稿をいただき、ありがとうございました。紙面をお借りしてお礼を申し上げます。また、次年度広報委員会の充実した紙面づくりに期待いたします。